

<研究報告>

身体表現活動を通して育まれる「社会性・市民性」および 「文化的認識・文化的表現」のコンピテンシーについて —スペインの初等音楽科授業デザインの検討を通して—

桐原 礼 信州大学学術研究院教育学系

キーワード：身体表現，コンピテンシー，授業デザイン，多文化共生，スペイン

1. 研究の背景と目的

スペインは、近年、学校の多文化化が著しく進行している国の一つである。かつては移民送り出し国であったが、1992年以降の経済成長により急激に移民を受け入れ続けてきた結果、ヨーロッパ最大の外国人受け入れ国となっている（梶田 2011,p.5）。主な移民はモロッコ人、エクアドル人、ルーマニア人であり¹、その他、イギリス人、イタリア人、中国人、ブルガリア人、ドイツ人、ポルトガル人、コロンビア人、フランス人、ボリビア人、ポーランド人、パキスタン人、ペルー人などである（中川 2016, pp.27-34）。スペインにおける移民問題は比較的新しい現象であり、価値観の違いや異なる文化および宗教を背景にした問題が起こったり、潜在的なレイシズムが一気に顕在化したりする中で、共存を模索している状態であるという（八嶋 2008, p.275）。このような中、多くは単身にて労働目的で入国してきた移民が、滞在の長期化に伴って家族を呼び寄せる傾向がみられ、必然的に外国にルーツを持つ子どもたちが学校内に増加していくこととなる。2015年1月時点のスペインの人口における移民の割合は9.6%であり、児童生徒数における移民の割合は8.5%にまで達している（桐原 2018a, p.27）。

こうした状況を反映して、社会労働党政権下の「教育基本法」（通称LOE法、2006年）より多文化共生推進の方針が打ち出され、言語や文化の異なる子どもたちへの対応として、学校教育において様々な改革が行われてきている²。またLOE法においてEUのキー・コンピテンシー³の概念が導入され、続く現行の「教育の質改善法」（通称LOMCE法、2013

¹ モロッコは歴史的にも地政学的にもスペインと関係が深く、1997年の約7.7万人から2015年には76万人にまで増加している。エクアドルは2001年にスペインとの間に締結された「移民協定」があり、1996年に3千人未満だったのが2009年にピークの44万人となった。ルーマニア人は1990年代後半から増え始め2015年には96.7万人となり、スペインにおける外国人在留者数第1位となっている。（中川 2016, pp.27-34）

² 移民の子弟は、文化的多様性や学習歴が様々であるため、例えば、マドリード自治州では、普通学級に入る前に1カ月間のスペイン語を中心とした特別クラスを設置している（安藤 2007, p.183）。

³ 30か国13の国際機関が参加し、2006年に提言された。正式名称は「生涯学習のためのキー・コンピテンシーに関する欧州参照枠組み」であり、すべての人にとって必要なコンピテンシーであるとしてい

年)にもこの方針が引き継がれており、すべてのコンピテンシー育成に向けて各教科の授業を構成することが求められている。LOMCE 法下における基礎コンピテンシーは、①言語コミュニケーション能力 (Competencia en comunicación lingüística), ②数学の能力・科学とテクノロジーの能力 (Competencia matemática y competencias básicas en ciencia y tecnología), ③デジタル能力 (Competencia digital), ④学び方を学ぶ (Aprender a aprender), ⑤社会性・市民性のコンピテンシー (Competencias sociales y cívicas), ⑥イニシアチブ感覚と企業家精神 (Sentido de iniciativa y espíritu emprendedor), ⑦文化的認識・文化的表現 (Conciencia y expresiones culturales) の7つである (Real Decreto 2014, p.19352)。この中で、多文化共生に向けて、音楽科が特に関わりがあるのは、「社会性・市民性」および「文化的認識・文化的表現」のコンピテンシーであると考えられる。

学校の多文化化への対応が迫られる中、音楽教育学においても、様々な国にルーツを持つ児童生徒間の関係性構築をどのように推進していくべきかという議論が高まってきている。例えば、Mediel (2010) による指導法の提示や、Bernabé (2013) の教員に向けた異文化研修の提案ほか、多くの研究がみられる。またスペインの初等音楽科⁴の内容は、LOE 法下のカリキュラムでは「聴取」と「演奏」の2つの領域で構成されていたが、LOMCE 法下のカリキュラムより、「動きとダンス」という新たな領域が設定された (Real Decreto 2014, pp.19404-19405)。音楽教育学を専門とする研究者の中には、身体の動きやダンスなど身体表現の教授学について大学で教鞭をとっている教員もみられ、音楽科授業に向けた指導法や教材の提案を行ってきている。例えば、身体の動きと世界の様々なダンスを取り入れている Vicente (2010), 世界のボディー・パーカッションを収集し教材化⁵を試みている Romero (2008) などの研究がある。実際に、初等音楽科教科書には様々な身体表現活動が掲載されており、音楽教室においても、身体表現活動を実施するための空間が設けられている例が確認されている (桐原 2018b)。このように、スペインの音楽科教育においては、学校における多文化共生の促進への対応やコンピテンシー育成に関連づけた授業デザインを実施してきており、さらに、「動きとダンス」という領域が音楽科に位置づけられているという特徴がある。

筆者はこれまでの研究において、多文化化の進行している小学校の音楽教員へのインタビュー調査によって、音楽科授業における児童生徒の関係性構築に向けて身体表現活動が効果

る。(本所 2016, p.102)

⁴ スペインは、17の自治州から構成されている。国が定めた法およびカリキュラムにもとづき、各自治州において作成されたカリキュラムが実施される仕組みとなっており、その中で、自治州内の言語や伝統的な舞踊を扱うことを重視する州もある。初等音楽はLOE法(2006年)までは必修科目、中等では学年によって必修および選択科目であったが、LOMCE法(2013年)下のカリキュラム改訂により、現在では初等および中等にて選択科目となった州がある。例えばムルシア州では、初等音楽科について従来と同様の時数を確保していたり (Decreto 2014, p.33058)、国の方針に逆行して音楽授業時数を増やしたりする州もある。

⁵ Bodymusic bodypercussion didáctica de la percusión corporal」(全5巻、2006年)には、世界の多様なボディー・パーカッションの要素を取り入れた音楽教育活動の実践方法の解説と、実践例の映像が収められている。

的であることを明らかにしてきた(桐原 2018a)。また、スペインの小学校音楽科教員が作成した指導計画書(Martínez 2016)の分析を通して、身体表現活動が多文化共生に関わりの深い「社会性・市民性」および「文化的認識・文化的表現」のコンピテンシーの伸長に関連づけられていることを確認してきた(桐原 2017)。しかしながら、指導計画書においては具体的な活動内容について知る事ができず、「社会性・市民性」および「文化的認識・文化的表現」のコンピテンシーにおけるどのような要素の伸長を目指しているのかが不明であるという研究上の課題が挙げられた。

今日、コンピテンシー育成に向けた授業デザインは世界的な潮流となっており(松尾 2014)、我が国の音楽科教育においても、育成すべき資質・能力を明確にしていくことが求められている。スペインにおける先駆的な取り組みについて検討し、音楽科における身体表現活動が多文化共生に資するコンピテンシー育成にどのように関連づけられるのか、示唆を得たいと考えた。

そこで本研究においては、スペインの音楽科教育における身体表現活動が、「社会性・市民性」ならびに、「文化的認識・文化的表現」のコンピテンシーのどのような要素に結びつくのかについて検討することとした。活動内容・評価・コンピテンシーを一体化させた授業デザインに位置づけて実践事例を検討することにより、身体表現活動を通して育まれる多文化共生に資するコンピテンシーの要素について、具体的に提示することを目的とした⁶。

2. 調査の対象と方法

まず始めに、スペインの LOE 法下のカリキュラム(Real Decreto 2006, pp.43058-43063)における各コンピテンシーの定義について確認し、多文化共生に関わるキーワードを抽出した。また、現行の LOMCE 法下の初等音楽科カリキュラム(Real Decreto, p.19405)より、「動きとダンス」領域の評価の特徴について整理した。

続いて、2013年、2014年、2018年に日本の T 大学および S 大学にて行われた、スペイン人 2 名(公立小学校音楽科教員、教員養成系大学の音楽科教員)による特別講義(主として初等音楽科を想定した身体表現活動)⁷のビデオ録画データを分析の対象とした。各活動内容について、身体表現活動の評価項目、「社会性・市民性」および「文化的認識・文化的表現」のコンピテンシーの内容を示すキーワードとの関連づけを行った。

⁶ 本研究は、日本学校音楽教育実践学会第 23 回全国大会(於：京都教育大学 2018.08.18)における口頭発表の内容の一部を取り上げ、加筆・修正したものである。口頭発表の内容は、『学校音楽教育実践論集』2019 No.3 の pp.99-100 に掲載されている。

⁷ スペイン・ムルシア州の公立小学校に勤務する音楽科教員、スペイン国立ムルシア大学教育学部の音楽科教員を筆者が勤務する大学に招聘し、特別講義を実施した。2013 年および 2014 年は、T 大学において各 90 分の特別講義が実施された。2018 年は S 大学において、180 分の特別講義が実施された。これらの講義においては、ワークショップ形式でスペインの初等音楽科授業の内容を想定した身体表現活動が実施され、参加学生は様々な身体表現活動を体験した。

3. コンピテンシーのキーワードおよび「動きとダンス」領域の評価項目

3.1 「社会性・市民性」のコンピテンシーと「文化的認識・文化的表現」のコンピテンシーのキーワード

LOE 法においては 8 つのコンピテンシーが示されていたが、続く LOMCE 法では 7 つに整理された。また LOE 法における「文化的・芸術的」コンピテンシーは、LOMCE 法においては「文化的認識・文化的表現」のコンピテンシーのように名称が多少変更されている。LOE 法下の国レベルのカリキュラムにおいて各コンピテンシーの定義が示されたが、その後の LOMCE 法下ではこれらに関する記述が特にみられないため、LOE 法下のカリキュラムにおける定義が現在でも引き継がれていると考えられる。コンピテンシー名の表記は若干変わっているが、実際に、LOMCE 法以降の小学校音楽教員作成による指導計画書にも、LOE 法下で示された定義が用いられているため、本研究においてもこれを活用することとした。

LOE 法下のカリキュラムにおける各コンピテンシーの解説文 (Real Decreto 2006 , pp.43058-43063) より、「社会性・市民性」のコンピテンシーと「文化的・芸術的」コンピテンシーのキーワードを挙げた (表 1)。

表 1. LOE 法における「社会性・市民性」および「文化的・芸術的」コンピテンシーのキーワード

「社会性・市民性」コンピテンシー	「文化的・芸術的」コンピテンシー
生活している社会の現実を理解する, 世界の歴史や社会の事実の理解, 多元性の理解, 共存と摩擦に向き合う, 地域の自己確認 (居住している社会に共通した感情を備え持つ), グローバルな市民としての感情を表明する, 協力する, 共存する, 改善に向けた対話, 理解し合う, 評価し合う, 自分の意見を表明する, 他者の意見に傾聴する, 自分とは違う他者の視点を理解する, 参加する, 自主的に判断する, 選択する, 特定の状況で行動する, 建設的な態度で解決する	表現を理解し価値を認める, 自発性, 想像力, 創造性, 協力, 他者の自主性と貢献を評価し支援する大切さを自覚する, 表現の自由と異文化の尊重, 文化間の相互対話の大切さ, 相違する考えを受け入れる, 共同作業, 表現の違いを認識する丁寧で柔軟な態度, 文化的な生活に参加すること, 文化的遺産の保存に貢献することに関心を高める

3.2 「動きとダンス」領域の評価項目

評価については、従来は、「評価規準」(criterios de evaluación) のみが示されていたが、LOMCE 法下のカリキュラムにおいて、新たに「学びのスタンダード」(estándares de aprendizaje evaluables) が導入された (以下、「学びのスタンダード」を「スタンダード」と表記する)。このスタンダードは、音楽科教員が実際に児童を評価するための項目である。

3 つの領域「聴取」「演奏」「動きとダンス」それぞれについてスタンダードが示されており、国レベルのカリキュラムにおいては学年の指定は特にみられない。各州のカリキュラムにおいては学年別にスタンダードが示されていることがあり、例えば、ムルシア州のカリキ

キュラムにおいては、国レベルのカリキュラムにおけるスタンダードにもとづき、州レベルで細分化したスタンダードを設定し、各項目について学年別に指定している (Decreto 2014)。このスタンダード項目は、教員による変更は認められておらず、活動内容とスタンダードを組み合わせ、教員がコンピテンシーとの関連づけを行い、指導計画書に明記することとなっている。また、1つのスタンダード項目について、複数のコンピテンシーを充てることができる。

LOMCE 法下の初等音楽科カリキュラムにおける、「動きとダンス」領域のスタンダード (Real Decreto, p.19405) について、その内容を示すキーワードを挙げた (表 2)。

表 2. 「動きとダンス」領域のスタンダードおよびキーワード

評価規準：身体表現およびダンスにおける表現と創造の能力を獲得する。身体表現とダンスにおける、文化遺産への寄与を評価するとともに、社会的な相互作用の形式としてその表現を楽しむ。	
スタンダード	キーワード
1. 身体が、感情や情緒、社会との相互作用の形式のための表現媒体であることを認識する	身体の動きを通じた感情、社会とのつながり
2. ダンスを表現する際に音楽との関連やポーズをコントロールする	音楽に身体の動きを合わせる
3. 様々な地域や時代のダンスについて、芸術および文化の遺産への寄与であることを評価し再認識する	異文化理解、世界各地の伝統的なダンス
4. 文化的な伝承の重要性を理解しながら伝統的なダンスを表現する	自国文化理解、国内各地の伝統的なダンス曲
5. 音楽作品に対応する振付を考案する	創造性

4. 事例分析の結果と考察

対象とした特別講義において、19の活動事例が特定された。「動きとダンス」領域のスタンダードにもとづき、事例を以下のように分類するとともに、コンピテンシーの具体的な要素を示すキーワードと関連づけた（「社会性・市民性」のコンピテンシーを「CSC」、 「文化的認識・文化的表現」のコンピテンシーを「CEC」と表記している）。

4.1 「身体が、感情や情緒、社会との相互作用の形式のための表現媒体であることを認識する」に関わる活動およびコンピテンシー

「音楽に合わせて即興的に動く」、「Break Mixer」(フォークダンス)、「ポロネーズ」(ダンス)、「ボディー・パーカッション」の4つの活動がここに分類された。これらの活動においては、先生や友達の動きを真似たり、即興的にペアや3人組になったり、ボディー・パーカッションの即興的な表現をしたりするなど、他者との交流場面が多く設定されていた。

身体が感情や情緒の表現媒体であることを認識する活動として、「ボディー・パーカッ

ションの即興的な表現」が挙げられ、「自分の意見を表明する：CSC」, 「創造性：CEC」, 「他者の意見に傾聴する・他者の視点を理解する：CSC」, 「相違する考えを受け入れ, 表現の違いを認識する丁寧で柔軟な態度：CEC」が関連づけられた。また, 身体が他者との相互作用のための形式のための表現媒体であることを知るために, ダンスの実践を通して, 「文化的な生活に参加する：CEC」こととなる。ペア交代の際などに, 互いに一瞬の戸惑いや葛藤のような様子がみられることがあり, 「共存と摩擦に向き合う：CSC」, 「建設的な態度で解決する：CSC」, 「他者の自主性と貢献を評価し支援する大切さを自覚する：CEC」機会となる。

4.2 「ダンスを表現する際に音楽との関連やポーズをコントロールする」に関わる活動およびコンピテンシー

「Just Can't Get Enough」(ポップス), 「トリッチ・トラッチ・ポルカ」(ヨハン・シュトラウス 2 世作曲), 「サーカス・ギャロップ」(スーザ作曲), 「四季」より「冬 第 2 楽章」(ヴィヴァルディ作曲), という 4 曲を扱った活動がここに分類された。これらの活動においては, フレーズに合わせて動いたり, リズムや強弱に合った身体の動きを工夫したりするような場面がみられた。また, 伴奏楽器の代用として声や身体の様々な音を用いながら楽曲に合わせて動いたり, ダンスの形式においてペアでステップを踏みながら強弱やレガートの表現を工夫したりするような活動であった。

音楽との関連を捉えながら身体の動きをコントロールするために, 基本的な動きを練習する「自主性：CEC」や, クラスメイトと合わせるために「協力する：CSC, CEC」ことが必要となる。このような中, 強拍・弱拍や強弱を感じ取ったり, 情景を身振りで表したりする活動においては, 「想像力：CEC」を働かせたり, 「自分の意見を表明する：CSC」, 「創造性：CEC」につながる。

4.3 「様々な地域や時代のダンスについて, 芸術および文化の遺産であることを評価し再認識する」に関わる活動およびコンピテンシー

「Alunelul」(ルーマニア), 「Calnavalito」(ボリビア), 「Die Kutsche」(オーストリア), 「ハリウッド映画のダンス」, という 4 つのダンスの活動がここに分類された。ここでは, 海外の舞踊を体験する中で, 特殊なリズムや動きを学ぶ場面がみられた。例えば, 「Calnavalito」(ボリビア) は, 中南米(ペルー, アルゼンチン, ボリビアなど)に広く伝わる伝統的なダンスであり, 前傾姿勢で袋を担いでいる様子を表しているとされている。1 列で手をつなぎながら先頭についていく動きを中心とし, 音楽の構造やフレーズに合った数種類のステップや動きを表現する。また「Die Kutsche」(オーストリア) は, 荷馬車の様子を表しており, 4 人で前を向いて手をつなぎ 4 つの車輪を表現している。

この項目は, 主として, 世界各地の伝統舞踊を扱い, 異文化理解を促進しながら, 音楽文化への認識を深めることを意図していると考えられる。伝統舞踊の文化的な背景について知ったり, 表現の違いを認識したりするような活動は, 「世界の歴史や社会の事実の理解：CSC」を促し, 「他者の視点を理解する：CSC」, 「相違する考えを受け入れ, 表現の

違いを認識する丁寧で柔軟な態度：CEC」に関わっている。こうした世界の多様な舞踊の体験は、「異文化の尊重：CEC」, 「多元性の理解：CSC」に関わる経験を積みながら、「グローバルな市民としての感情を表明する：CSC」ことにつながっていく。

4.4 「文化的な伝承の重要性を理解しながら伝統的なダンスを表現する」に関わる活動およびコンピテンシー

「L'Hereu Riera」(スペイン・カタルーニャ地方), 「ホタ〜Hierva Buena〜」(スペイン・ムルシア州), 「セビリャーナス」(スペインで広くみられる民俗舞踊), 「パン屋のリズム」(スペインの伝承遊び), 「Esku Dantza」(スペイン・バスク地方), という5つのダンスの活動がここに分類された。ここでは, スペインの各地の特色が現れた伝統的な文化や, 特殊なリズムのステップについて学ぶ場面がみられた。例えば, スペイン・カタルーニャ地方(ジローナ)の伝統的なダンスは, 病気の女性を救うために十字架に祈りをこめた男性が, 女性の回復を喜んで十字架の上で踊ったという言い伝えによるものである。2本のスティックの上を8/3拍子のリズムにのって軽々としたステップで表現する。また, スペイン・バスク地方の伝統的なダンス「Esku Dantza」は, 4/4と4/2拍子の組み合わせのリズムにのって, ペアでタイミングを合わせながら踊るものである。

この項目は, 主としてスペイン各地の伝統舞踊を体験しながら, 文化的多様性に気づくとともに価値や伝承の意義を学ぶことを意図していると考えられる。このような舞踊の活動は, 「生活している社会の現実を理解する：CEC」, 「文化的な生活に参加する：CEC」体験となり, 「地域の自己確認(居住している社会に共通した感情を備え持つ)：CSC」, 「文化的遺産の保存に貢献することに関心を高める：CEC」ことにつながる。

4.5 「音楽作品に対応する振付を考案する」に関わる活動およびコンピテンシー

「MAMMA MIA」(ポップス), 「トルコ行進曲」(ベートーベン作曲)という2つの楽曲について, 身振りや動きを考案する活動がここに分類された。ここでは, 音楽に合わせて机の上でリズムを奏でたり, 全身でフレーズや強弱を表現したりする場面がみられた。また, 様々な対象物を思い浮かべて身振りで表現したり, フレーズに合った身体表現を考案したりするような活動場面が設定されていた。

各自がアイデアを提示し(「参加する：CSC, CEC」, 「自主性：CEC」, 「創造性：CEC」), クラスメイトと共に動きを考案していくための, 「協力する：CSC・CEC」, 「協働：CEC」が重要となる。この際, グループ内で「改善に向けた対話：CSC」をする中で, 「他者の視点を理解する：CSC」, 「相違する考えを受け入れ, 表現の違いを認識する丁寧で柔軟な態度：CEC」とともに, 「他者の自主性と貢献を評価し支援する大切さを自覚する：CEC」ことにも関わっている。

4.6 考察—身体表現活動によって育まれる「社会性・市民性」および「文化的認識・文化的表現」のコンピテンシー—

身体表現活動の各事例において, 「社会性・市民性」および「文化的認識・文化的表現」の2つのコンピテンシーが関連づけられ, 「自主性(自発性)のもとに参加・協力する：

「CSC・CEC」ことは、すべての事例において共通していた。これは、実技を伴う活動において最も基本的な事項であり、「表現を理解し価値を認める：CEC」ことに直結していくと考えられる。

また、個々の「創造性：CEC」が発揮されるような場面では、自身のアイデアや考えを「表明する：CSC」とともに、「他者の意見に傾聴する：CSC・CEC」機会ともなりうるため、「他者の視点を理解し相違する考えを受け入れる：CSC・CEC」ことにつなげていくような授業デザインが期待されていると考えられる。ペアやグループ活動の際には、より子ども同士の直接的な交わりがみられるため、「協働や対話：CSC・CEC」に力点が置かれ、時には「摩擦と向き合う：CSC」ような中で、「相違する考えを受け入れ：CEC」、「建設的な態度で解決していく：CSC」体験となるであろう。文化の多様性を扱う際には、世界の様々な地域の舞踊を通して、「歴史や社会の事実：CSC」など文化の背景について知りながら、「多元性：CSC」の理解および「グローバルな視点：CSC」を獲得していくような授業デザインが可能であろう。一方、国内の様々な地域の舞踊を扱う際には、「文化的な生活に参加：CEC」しつつ、「生活している社会の現実：CSC」を知りながら、「自己認識や文化的遺産の保存：CSC・CEC」などに向けて意識を高めていく機会となるであろう。

この際、「文化的認識・文化的表現」のコンピテンシーは、主として認知的・情意的な側面に関わりが深く、「社会性・市民性」のコンピテンシーは、特に行動面の変容を促すものであると考えられる。

5. まとめ

本研究においては、多文化共生に向けて身体表現活動を効果的に実施していくために、スペインの音楽科における、活動内容・評価・コンピテンシーを一体化させた授業デザインに着目した。事例検討においては、それぞれの身体表現活動について、「動きとダンス」領域のスタンダードを確認するとともに、身体表現活動によって育まれる「社会性・市民性」および「文化的認識・文化的表現」のコンピテンシーの要素について明らかにした。こうした授業デザインにおいては、活動内容と共にコンピテンシーの具体的な要素に着目することができる。さらに、授業時の活動がどのような能力につながっていくのかを明確化しながら、より効果的に成果を上げられるよう、活動内容を焦点化するためにも有効であると考えられる。

本研究において、身体表現活動を通して育まれるコンピテンシーの具体的な要素を提示したことにより、音楽科が実際に多文化教育に貢献し得るという根拠の一旦を提示することができたと考える。また、身体表現活動によって社会性を高め、文化的認識を深めていくことは、他者と共にある音楽表現の高まりや、他者の視点を取り入れることによる音楽的認識の深まりにも貢献し得るため、身体表現活動を音楽科授業における表現および鑑賞の活動に有効に位置づけることができるであろう。今後も、多文化共生に資する音楽科活

動のあり方について検討していきたい。

〈付 記〉

本研究で取り上げた特別講義実施に協力いただいたスペイン国立ムルシア大学の Vicente Nicolás, Gregorio 氏, ムルシア市内公立小学校音楽教員 Martínez Fernández, Marcos Jesús 氏に, この場を借りて謝意を表したい。

本研究は, 日本学術振興会科学研究費(課題番号: 17K04761)の支援を受けて行われた。

引用文献

- Bernabé Villodre, M^a M. (2013). Propuesta formativa intercultural para el docente musical. *Educatio Siglo XXI, Vol.31 núm.2. pp.297-322.*
- Decreto n.º 198/2014, de 5 de septiembre, por el que se establece el currículo de la Educación Primaria en la Comunidad Autónoma de la Región de Murcia. *Boletín Oficial de la REGIÓN de MURCIA. Número 206, de 6 de septiembre de 2014, pp.33054-33556.*
- Martínez, M.J. (2016). Programación Docente Música-LOMCE. 2016-2017. CEIP Fátima.
- Mediel, O.G. (2010). Una experiencia de curriculum musical intercultural. *Música y Educación. Núm.81. pp.18-33.*
- Real Decreto 1513/2006, de 7 de diciembre, por el que se establecen las enseñanzas mínimas de la Educación primaria. *BOE.núm.293. (Viernes 8 diciembre 2006).*
- Real Decreto 126/2014, de 28 de febrero, por el que se establece el currículo básico de la Educación Primaria. *BOE. núm. 52, de 1 de marzo de 2014, pp.19349-19420.*
- Romero, J. (2008). Percusión corporal en diferentes culturas. *Musica Y Educación. Número 76, pp.45-96.*
- Vicente, G. (2010). Movimiento y danza en Educación Musical: un análisis de los libros de texto de Educación Primaria. Universidad de Murcia.
- 安藤万奈 (2007)「教育(第3章 生まれ変わったスペイン)」坂東省次・戸門一衛・碓順治(編)『現代スペイン情報ハンドブック(改訂版)』三修社, pp. 178-186.
- 梶田純子 (2011)「多民族国家」川成洋・坂東省次『スペイン文化辞典』丸善株式会社, pp.4-5.
- 桐原礼 (2017)「身体表現活動を通じたコンピテンシー育成に関する考察」日本音楽教育学会第48回大会(於 愛知教育大学, 2017.10.21)発表資料.
- 桐原礼 (2018a)「多文化状況下における児童間の関係性構築に向けた音楽教員の対応に関する考察—スペイン・ムルシア州におけるインタビュー調査を通して—」『音楽教育学』

vol.47 no.2 日本音楽教育学会, pp.25-36.

桐原礼 (2018b) 「ボディー・パーカッションを中心とした身体表現活動における学びについて—スペインの初等音楽科における取り組みより—」『溪声』第 66 号, pp.56-64.

中川功 (2016) 「スペイン移民社会の変遷」牛島万 (編著)・坂東省次 (監修)『現代スペインの諸相—多民族国家への射程と相克—』明石書店, pp.21-45.

本所恵 (2016) 「EU におけるキー・コンピテンシーの策定と教育評価改革」田中耕治 (編著)『グローバル化時代の教育評価改革—日本・アジア・欧米を結ぶ—』日本標準, 100-111.

松尾知明 (2014)『教育課程・方法論:コンピテンシーを育てる授業デザイン』学文社.

八嶋由香利 (2008) 「移民 (スペイン人の関心事と社会問題)」碓順治『ヨーロッパ読本 スペイン』河出書房, pp.270-275.

(2019年 9月30日 受付)

(2020年 2月21日 受理)